

在留外国人が家族の受診時に経験した困難

—ネパール出身者1事例の分析—

Difficulties by a foreign resident in Japan experienced at the time of the consultation of his family
—A case analysis of a Nepalese—

○隍智子¹, 中尾友美¹, 清水安子²

Motoko Hori, Tomomi Nakao, Yasuko Shimizu

1 千里金蘭大学, 2 大阪大学

Senri Kinran University, Osaka University

【背景と目的】

近年、在留外国人数は増加の一途をたどっており、中でも増加率が高い国の一つとしてネパールが挙げられる。ネパールは現在6番目に在留外国人が多い国となっており、特に労働者の増加が著しい。

日本の医療現場では外国人患者に対応するために様々な対策を講じているが、希少言語への対応は十分ではない。また、在留外国人患者にとって、支えてくれる家族の存在は非常に重要であるが、言語や習慣が異なる地で、患者の疾患や治療に関する不安を持ちながら、家庭や仕事、地域における役割の調整や公的制度の手続きなどを行っていく患者家族の困難に着目した調査は少ない。そこで本研究では、希少言語とされるネパールの出身者1事例が家族の受診時に経験した困難を明らかにすることを目的とする。

【方法】

家族が日本の医療機関を受診した経験があるネパール出身者1名を研究協力者(A氏)とし、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。調査期間は2021年11月であった。A氏は不便なく日常生活を送ることができる日本語能力を有していたため、インタビューは日本語で実施した。インタビューデータの逐語録の中から、家族が日本で医療を受けた際に経験した困難について語られた箇所を抽出し、SCAT (Steps for Coding and Theorization) の手法で分析を行った。なお、本研究は、千里金蘭大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号: K23-025)。

【結果】

ネパール出身、40代男性のA氏は、管理職として日本の会社に勤務しており、日常生活や仕事は日本語で行うことができる。A氏は、ネパール出身の妻と、日本で生まれた3人の子どもと暮らしている。A氏は妻よりも先に来日しており、子育てを始めた頃には日本語で日常生活を送ることが可能であった。

A氏が家族の受診時に経験した困難について、以下のストーリーラインが作成された。【 】は抽出されたテーマを示す。

A氏は、子どもが熱を出した際、【子どもをどこに受診させればよいかわからない焦りと不安】を感じる中、【アドバイスを求めるのは母国で暮らす親】であった。自治会活動が活発ではない地域では、【近隣住民との交流が得られない孤独感】を感じており、困難を乗り越えるためには【経験を重ねて身に着ける対応

力】が必要であった。

我が子の緊急対応が必要となった際には、【救急車の電話番号がすぐに出てこない焦り】【実際に直面して初めて知る時間外受診の仕組みへの戸惑い】【夜間受診の交通手段を確保する方法についての苦慮】などを経験した。また2020年から始まった【コロナ禍の受診ルールに関する情報収集の難しさ】を感じていた。

家族の体調不良時には、仕事を休んで看病をしたり他の家族の協力を求められる環境にあった【母国と日本における家族と仕事に対する価値観の違い】を感じた。また、母国では男性が家事育児をする習慣がなかったため、日本に住む唯一の親族である【男性である兄に協力を求めることへの遠慮】があり、妻の体調不良時には【母国では男性がしない家事をせざるを得ない状況】に適応する必要があった。

日本語が苦手なA氏の妻は【受診時に求められる高い日本語能力】に強い不安を抱え、A氏のサポートを必要とした。また、【日本語で受ける医師からの口頭説明を理解することにおける限界】があり、かつては、辞書を持ち歩く、詳細なメモをとって帰宅後に調べる、といった対応を行っていた。さらに、【在住地域における医療施設に関する多言語情報の不足】がある一方で、大病院受診前に近医で紹介状を作成してもらわなければならない【日本の医療制度に対する疑問】を抱いていた。

【考察】

本研究における協力者のA氏は、言語や制度、習慣などにおける母国との違いから、家族の受診に際して困難感や疑問を感じていた。しかし、家族の健康を守るために自ら解決策を模索し対応していく力を持っていた。また、核家族として日本で生活するうえで、母国でのジェンダー役割や仕事に対する認識を柔軟に変化させたことが、家族機能の保持につながったと考えられる。さらに、A氏とその家族にとって、身近な相談相手となる近隣住民との繋がりは、精神的安寧を与えるものであった。

今回のインタビューにおいて、日常生活に不自由を感じない日本語能力を持っていたとしても、医療を受ける際には言語による障壁を強く感じる事が語られた。やさしい日本語を含めたより細やかな言語サポートが提供されることで、困難に対処する方法を見つけるだけでなく、制度の理解や積極的な受診行動にも繋がる事が示唆された。

【利益相反(COI)について】

本研究における利益相反は存在しない